

## 論 説

## 生産関係と資本の価値増殖

頭 川 博

はしがき—問題の所在

- 1 貨幣と社会関係
- 2 生産条件の排他的所有
- 3 排他的所有と価値増殖
- 4 先行研究の陥穽

むすび

## はしがき—問題の所在

生産条件(生産手段プラス生活手段)は、超歴史的に存在するため、それ自体資本ではなく、排他的に所有されたばあいにも、資本として機能する。だから、資本とは、排他的に所有された生産条件である。生産過程で、排他的所有になる生産条件は、その一成分の生活手段との交換でえられた労働力の生産的消費からうまれる剰余価値分だけ、自己増殖する。そうだとすれば、資本とは生産関係だというマルクスの命題は、生産条件の排他的所有が生産関係だということをいみすることになる。

そこで、生産条件の排他的所有は、なにゆえ、それ自身生産関係をあらわすのかというプリミティブな疑問がうまれる。いったい、生産条件の排他的所有は、なぜ、それ自身資本家と労働者とが社会的生産でとりむすぶ特有な関係の表現なのであろうか。ここには、『資本論』研究における本質的には未解決の根本問題の一つがある。というのも、資本が生産関係だという命題は、生産関

係こそ資本の本質的機能である剰余価値を規定する根本要因だということに帰着するが、これをいいかえれば、生産条件の排他的所有が労働力による剰余価値の創造を規定することになるからである。もし、生産条件の排他的所有は、それ自身生産関係をなし、労働力による剰余価値の創出を規定する特殊歴史的な原因だとすれば、資本とは生産関係だという命題にこめたマルクスの含意つまり生産条件の排他的所有が剰余価値の直接的な規定要因だというその核心にせまることになる。ひるがえって、生産条件の排他的所有は、それ自身生産関係として剰余価値を直接規定する因果が説明できれば、蓄積財源をうみだす労働力の特殊な属性に剰余価値がうまれる根拠をもとめる見地の転倒性が指摘できることになる。けだし、資本が生産関係だという命題をふまえれば、生産条件の排他的な所有は、剰余価値成立の二契機である労働力の使用価値と価値をとともに特殊歴史的に規定し、労働力による剰余価値の創造は、生産条件の排他的な所有の直線的な結果だということになるからである。労働力商品の生産的消費は、生産条件の排他的所有のタテの反面だというその特有な社会的条件が見落とされる結果、労働力そのものが剰余価値を創出する内在的な属性をもって表面的にあらわれるにすぎない。そうじて、資本とは生産関係だという命題は、生産条件の排他的所有がそれ自身なぜ生産関係なのか、そしてその排他的所有はいかにして剰余価値生産を規定するのかという二つの論点をふくむ『資本論』の根本問題であるのにはんして、これまで、その命題に内包された本質的なポイントがつかまれていない。資本とは生産関係だという命題は、剰余価値の秘密にかかわり、『資本論』の座標軸を構成する。

それゆえ、本稿の課題は、生産条件の排他的所有が、それ自身生産関係であることをしめしたうえて、剰余価値をうむ労働力の特殊な属性を規定する因果をとき、もって資本とは生産関係だという根本命題の内面に光をあてることにある。

## 1 貨幣と社会関係

マルクスによれば、ごく少数の人々による生産条件の排他的所有そのものが特有な生産関係である。そこで、排他的所有になる生産条件がひとつの生産関

係だという命題を理解するさい、その前提として、貨幣はそれ自身ひとつの社会関係だという命題の吟味が有益である。本節では、商品の一般的な等価形態である貨幣は、社会関係をあらわすというマルクスの真意をあきらかにする。

マルクスによれば、貨幣は、そのものが一つの社会関係をあらわす。「貨幣は、一つの物ではなくて、一つの社会的関係である。<sup>①</sup>」（『哲学の貧困』国民文庫、高木佑一郎訳、115ページ）「重金主義は、金銀から、それらが貨幣としては社会的生産関係を、といっても特別な社会的属性をもった自然物の形態で、表わしているということを見とらなかつた。」（*Kapital*, I, S. 97）それでは、貨幣は、それ自体、本来的には金のかたまりにすぎないのに、なぜ社会的関係の表現であるのだろうか。ここに、排他的な所有になる生産条件が、それ自身一つの生産関係である秘密をとく鍵がかくされている。

「貨幣はすべての商品の一般的な等価形態であ」（*Kapital*, II, S. 36）るといわれるとおり、貨幣が社会関係の表現である理由は、それが一般的な等価物である事実のうちにひそむ。というのも、貨幣が一般的な等価物であるのは、金以外のすべての商品が金を鏡にしておのおのの価値をうつしだすからにほかならない。つまり、貨幣が排他的に一般的等価形態にたつ事實は、金という一商品がそれ以外のあらゆる商品の価値表現材料の役目をになう関係を内包している。だから、貨幣という一つの存在が社会的関係の表現であるのは、金という一者がそれ以外の諸商品の価値鏡の役割をはたすという他者とのつながりをふくむことに起因する<sup>②</sup>。ところが、貨幣という一つの存在にあっては、それ以外のあらゆる商品が金をもって価値表現の材料にする不可分な連関は目にみえない。それどころか、金が価値の独立的な定在であるのは、その金属としてのすぐれた自然的属性にゆらいする外観をもってあらわれる。マルクスのつぎの説明は、貨幣が社会関係の表現である事実と直接に関連する。「一般的直接的交換可能性の形態をみても、それが一つの対立的な商品形態であって、ちょうど一磁極の陽性が他の磁極の陰性と不可分であるように非直接的交換可能性の形態と不可分であるということは、けっしてわからない。」（*Kapital*, I, S. 82）また、つぎのようにもいう。「一商品の等価形態が、他の諸商品の諸関係の反射であるのではなくて、その商品自身の物的な性質から生ずるかのような外観

は、個別的な等価物の一般的な等価物への発展につれて固まってくる。」（『資本論第1巻初版』国民文庫，岡崎次郎訳，33〔原〕ページ，圈点—マルクス）

貨幣がたんに一つの物質的な存在でありながら社会的な関係をあらわすのは、金がしめる等価形態という一極が、相対的価値形態という対極の存在を暗黙のうちに前提するためである。金が位置をしめる等価形態は、それが相対的価値形態と不可分であるため、貨幣は、それ自身一つの事物でありながら社会関係の表現として存在する。だから、一つの対象は、それが一つの存在にすぎないという表面的な理由で、社会的な関係の表現であることを否定することはできない。一つの事物そのものが別の事物との特定の関係をあらわす根拠は、磁石の両極のように、その一契機がしめす別の対極的な一契機との不可分な相関性にある。貨幣は、一般的な等価物という一つの対象にすぎないが、相対的価値形態と等価形態との相即不離の関連性のため、それ自身、社会的な関係をあらわす。一つの存在が特有な関係の表現である事実の判定は、そこにひそむ契機が個別に存在する対極的な契機とのあいだにもつ不可分な結びつきにある<sup>③</sup>。

以上、本節で、商品交換の産物としてうまれる貨幣は、金以外のすべての商品の価値鏡の役割をはたすため、それ自身一つの事物でありながら社会的な関係を表現するいわれをひきだした<sup>④</sup>。

- ① 「神秘的な性格は、社会的な諸関係すなわち生産にさいして富の素材的諸要素がその担い手として役立つところの社会的な諸関係を、これらの物そのものの諸属性に転化させ（商品）、またもつとはっきり生産関係そのものを一つの物に転化させる（貨幣）。」（*Kapital*。Ⅲ, S. 835）
- ② 「すべての他の商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係するので、リンネルの現物形態が、すべての商品とのその直接的交換可能性の形態となり、したがってまた直接にその一般的な社会的な形態となるのである。」（『資本論第1巻初版』国民文庫，30〔原〕ページ，圈点—マルクス）
- ③ 二つのものの不可分な相関といっても、光と影のように自然的な関係もあれば、富と貧困のように社会的な関係もある。社会的な関係の特色は、それが生産物の所有関係にもとづくところにある。
- ④ 貨幣をその転化形態としてうみだす商品それ自身も、一つの社会関係の表現である。石炭が溶鋳炉でつかわれる一方、ぎゃくに、その産物の鉄が炭鋳で労働手段として機能するつながりがしめすように、生産物は、潜在的にはおのおの社会的労働

の構成要素として依存しあう関連にたちながら、直接には私的労働によって独立的につくられるため、商品へと転化する。だから、商品は、それ自身、おのおの依存しあっている労働が別個におこなわれる社会関係を内包している。

## 2 生産条件の排他的所有

前節で、貨幣は、一つの独立した客体でありながら、それ自身社会的関係をあらわすゆえんをといた。そこで、本節では、議論をさらに一步すすめて、排他的に所有された生産条件からなりたつ資本は、それ自身一つの生産関係を表現することを主張する。

古典派経済学は、生きた労働に対比される「蓄積された労働」すなわち生産条件そのものを資本と規定した。「労働および資本(すなわち、蓄積された労働)<sup>①</sup>」(リカード『経済学および課税の原理』雄松堂書店、堀 経夫訳、410[原]ページ)とか「労働と資本……は直接的…労働…他は蓄積された…労働」(ジェームズ・ミル『経済学綱要』春秋社、渡辺輝雄訳、93ページ、圏点—ミル)または「資本すなわち蓄積された動産の富」(『チュルゴ経済学著作集』岩波書店、津田内匠訳、98ページ、圏点—チュルゴ)といわれるとおりである。

しかし、生産条件としての蓄積された労働は、生産活動がなりたつための超歴史的な必須要件をなすにすぎない。そこで、リカードにかんして「彼にとっては、資本主義的生産様式は社会的生産の自然的かつ絶対的な形態である」(『資本の流通過程』大月書店、中峯照悦・大谷禎之介他訳、290ページ)とマルクスがいうとおり、古典派は、資本主義をもって生産の自然的な形態と誤認したため、生産に永遠に必要な物質的条件をもって特殊歴史的のみ機能する資本と同一視した。「経済学者は、資本主義的生産過程をただ労働過程からのみ考察しているあいだは、資本は原料や道具などのような単なる物であると断定する。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、岡崎次郎訳、469c[原]ページ、圏点—マルクス)「リカードにとっては、…資本は単にある物的なもの、労働過程における単なる要素にすぎない。」(Mehrwert, MEGA, II/3・3, S. 1025, 圏点—マルクス) ちなみに、資本が生産条件と混同されれば、賃労働も人間

存在の永久の自然条件である労働そのものと一致することになる<sup>②</sup>。古典派にあっては、賃労働が剰余労働をふくむため労働者にあたえる苦痛も、労働本来の性格とみなされる。しかし、生産条件が資本に転化するのには、それが圧倒的な大多数にたいしてごく少数の人々の排他的な所有に帰属するばかりである。だから、資本とは、たんなる生産条件ではなく、排他的所有になる生産条件<sup>③</sup>にはかならない。「資本は、社会の一定部分によって独占された生産手段である<sup>④</sup>。」(Kapital, III, S. 823) マルクスが、資本をもって「労働条件の疎外された形態」(Mehrwert, MEGA, II/3・4, S. 1493, 圏点—マルクス)というもの、おなじ趣旨である<sup>⑤</sup>。資本家が排他的に所有する生産条件のうち、一方の生産手段は、他方の生活手段が転換された労働力によって生産的に消費され、剰余価値をふくむ新生産物に生まれかわる。等価なしに不払労働を入手する資本主義的取得様式がなりたつのは、資本をあらわす生産条件の排他的所有に起因する。

ところが、排他的所有になる生産条件は、それ自身一つの客体にすぎないため、生産関係の表現であるその深層がみおとされがちになる。たとえば、マニュファクチュアや機械制大工業にあらわされる生産様式をもって、生産関係をふくまないたんなる労働過程次元での生産方法ととらえる見方がある。しかし、排他的所有になる生産条件の具体化である生産様式をもって労働過程次元での生産方法に還元する見地は、生産関係の看過をしめす典型的な例といって過言でない。貨幣がそれ自身社会関係の表現であるのとおなじように、資本をあらわす排他的所有になる生産条件は、それ自身、特定の生産関係の表現にかならない。

すなわち、生産条件の排他的所有は、さかのぼってみれば、生産条件をおのおのが所有する独立生産者の両極分解にもとづく結果である。ここからもわかるように、生産条件の排他的所有は、それから排除される無所有の立場とおもてとうらの関連にたつ。排他的所有になる生産条件は、それ自身をみれば、なるほど一つの独立した存在にすぎないが、その所有から除外された圧倒的に大量の無産者の存在を前提にはじめてなりたつ。貨幣の生成は、商品の存在ときってもきれない因縁をもつのおなじように、生産条件の排他的所有は、

それからの排除を内包し、労働力商品によって固有になりたつ賃労働を予定する。「労働条件が労働者にたいしてとる形態には、彼の労働の社会的被規定性が対応する。」(MEGA, II / 3・5, S. 1849)したがって、生産条件の排他的所有は、貨幣が社会関係の表現であるのと同様に、それから排除された圧倒的多数者の賃労働とペアでしか存在しないため、それ自体のうちの一つの生産関係をふくんでいる。

さらにくわしくみれば、生産条件の排他的所有が生産関係を内蔵するため、マルクスは、資本と賃労働とは、生産条件の排他的所有という同一の関係のもつ両面だというのである。

「資本と賃労働とは、同一の関係の二つの要因を表現するものにすぎない。」(MEGA, II / 3・1, S. 100) 資本と賃労働とは、生産条件の排他的所有の両面であるため、単一不可分な存在である。ここで、資本と賃労働の二要因を規定する「同一の関係」とは、生産条件の排他的な所有をさす典拠について、つぎの引用文がしめすとおりである。「非労働者によるこの生産手段の所有こそは、労働者を賃金労働者に転化させ、非労働者を資本家に転化させるのである。」(Kapital, III, S. 51)したがって、生産条件の排他的所有という一つの事物のA面が資本だとすれば、B面が賃労働だという関係にたつ。生産条件の排他的所有という同一事物のA面とB面が、資本と賃労働である。ちなみに、生産条件の排他的所有をなりたさせる資本の本源の蓄積が賃労働の生成でもあるという事情は、その排他的所有が資本と賃労働の二面を内包することをものがたる。

したがって、排他的所有になる生産条件がそれ自身生産関係の表現だとすれば、資本とは、古典派の規定のように、たんなる物ではなく、本質的に生産関係だという結論に到達する。「資本もまた一つの社会的生産関係である。それは一つのブルジョア的生産関係であり、ブルジョア社会の一生産関係である。」(『賃労働と資本』国民文庫、村田陽一訳、46ページ、圏点—マルクス)「資本は物ではなく、一定の、社会的な、一定の歴史的な社会構成体に属する生産関係である。⑥」(Kapital, III, S. 22) ここで、直接には、資本という一つの要因が生産関係に還元されている事実に限りの注意を喚起すべきである⑦。資本が生産関係だという命題は、生産条件の排他的所有が生産関係の表現だということと

おなじである。

以上、本節で、排他的所有になる生産条件は、それからの排除と一体の関連にたつため、それ自身で一つ生産関係の表現<sup>⑧</sup>である根拠をといた。だから、生産条件が資本になるのは、特有な生産関係をあらわすかぎりだ<sup>⑨</sup>というばあい、生産関係とはその排他的所有にひとしい。

- ① 「リカードにとっては資本はただ『蓄積された労働』として『直接的労働』と区別されるにすぎない。」(Mehrwert, MEGA, II / 3・3, S. 1025)
- ② マルクスはつぎのようにいっている。「労働が賃労働と一致するならば、いま労働条件が労働に対立してとる一定の社会的形態もまた労働条件の素材の定在と一致する。」(Kapital, III, S. 833) おなじように、労働条件がその社会的形態と混同されれば、賃労働も労働そのものと同一視される。
- ③ だから、「過去の労働を資本にする社会的生産関係のこの一定の形態」(MEGA, II / 3・1, S. 285) とは、中心的には生産条件の排他的所有をさす。
- ④ ここで「独占された生産手段」とは、「生産手段—それは生活手段をも含む—」(MEGA, II, / 3・6, S. 2238) とか「生産手段—労働手段および生活手段—」(Kapital, III, S. 266) とかいわれるとおり、生活手段を内包している。また、別の箇所での、資本とは「独立化された力として労働者に相対する物的労働条件」(Mehrwert, MEGA, II / 3・3, S. 1025) だという規定も、おなじ趣旨である。「物的労働条件」とは、「客体的な労働条件(生産手段) …主体的な労働条件(生活手段)」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫, 473 [原] ページ, 圏点—マルクス) というとおり、生産手段と生活手段の両方をふくむ。
- ⑤ 資本が排他的所有になる生産条件だという規定にかんして、本源の蓄積についてのつぎの文言も参考になる。「資本の本源の蓄積。…労働者および労働そのものにする労働条件の独立化である。」(Mehrwert, MEGA, II / 3・4, S. 1450, 圏点—マルクス)
- ⑥ 「一定の社会的生産関係である資本」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫, 463 [原] ページ, 圏点—マルクス)・「資本を資本とするところの社会的な生産関係」(MEGA, II / 3・5, S. 1604)・「一つの生産関係としての資本の概念」(MEGA, II / 3・1, S. 141, 圏点—マルクス)。
- ⑦ 主として『資本論』第I巻第10章「相対的剰余価値の概念」に登場する形容句のない「生産様式(Produktionsweise)」(Kapital, I, S. 333, S. 334, S. 337) は、生産条件の排他的な所有を前提になりたつため、それ自身資本主義特有な生産関係を内蔵している。もし特定の規定のない生産様式をもって労働過程次元上でのたんなる生産方法とみなせば、資本を蓄積された労働に還元した古典派とおなじ落とし穴にはまることになる。



- ⑧ 「産業資本の存在は、資本家と賃金労働者との階級対立の存在を含んでいる。」( *Kapital*, II, S. 61) 「自分を増殖する価値としての資本は、階級関係を、賃労働としての労働の存在にもとづく一定の社会的性格を、含んでいるだけではない。それは、一つの運動であり、いろいろな段階を通る循環過程である。)( *Ibid.*, S. 109, 圏点—頭川)
- ⑨ 「生産物が資本になるのは、ただ、それがあある特定の、歴史的に規定された社会的生産関係を表わすかぎりにおいてでしかない。」( *MEGA*, II / 3 · 1, S. 137, 圏点—マルクス)

### 3 排他的所有と価値増殖

前節で、排他的所有になる生産条件は、その自体一つのプロダクト関係をあらわす理由を考察した。ところが、資本とは生産関係だという命題の眼目は、生産関係によって剰余価値がうまれる点にある。だから、排他的所有になる生産条件が生産関係だとすれば、その生産条件の排他的所有そのものが、剰余価値を直接に規定する関係にたつことになる。つまり、排他的所有になる生産条件が生産関係だとすれば、その生産条件の排他的所有は、それが直接的な規定要因となって、剰余価値をうみだすという因果関係をなりたたせる。けだし、剰余価値は、生産条件の排他的所有が母胎となつてうみだすその独自の自己増殖分だからである。「剰余労働の創造ということがまさに資本の概念なのである。」( *Grundrisse*, *MEGA*, II / 1 · 1, S. 255) ようするに、資本は生産関係だという命題は、生産条件の排他的所有がなぜそれ自身生産関係であるのか、さらにそれはいかにして剰余価値の創造を規定するのかという二つの論点からなりたつ。前者の論点は前節ですませたが、後者の論点はのこっている。そこで、本節では、排他的所有になる生産条件が価値増殖を成立させる一本のすじみちをとくとき、剰余価値は、労働力に反映した生産条件の排他的所有の直接的な果実であるという事実を主張する。

剰余価値は、労働力の発揮によって支出される生きた労働によって形成される。そのため、剰余価値の直接的な源泉は、労働力であるという認識でもって能事おわれりとする傾向がねづよく定着している。しかし、生産条件は、特定

の条件のもとでのみ資本として機能するのとおなじように、労働力は、特定の条件のもとでのみ剰余価値をうみだす。だから、剰余価値がなにによって創造されるかをみきわめる問題の焦点は、労働力が剰余価値をうむ社会的な条件のいかんにある。

それでは、労働力が剰余価値を形成するのは、いかなる社会的な条件によってであろうか。結論をさきまわりすれば、労働力による剰余価値の創出は、生産条件の排他的所有によって直接規定される。生産条件の排他的所有こそ、労働力による剰余価値の創造を直接にもたらず独立的な要因である。生産条件の排他的所有というおなじタテのはんめんには、労働力の商品化がなりたつため、排他的所有になる生産条件は、労働力商品の二要因を特殊歴史的に規定することによって、剰余価値を創造する。生産条件の排他的所有は、労働力の価値と使用価値とをとともに特有な仕方規定する。すなわち、まず、生産条件の排他的所有は、労働者の再生産によする必要労働の分量をたんなる労働力の再生産のための分量にちいさく圧縮して、労働力の価値を規定する。独立生産者のように、生産条件を労働者自身が所有するばあい、必要労働分量は、蓄積財源の生産に支出される労働を包含する。一方、労働力の使用価値も、その価値と同様に、生産条件の排他的所有によって特殊歴史的に規定される。労働力は、生産条件の一分成分である生活手段と交換され、資本家の処分権にゆだねられるため、必要労働をこえる1労働日全体にわたって労働支出を強制される<sup>①</sup>。労働力の合目的な消費は、資本家によるその処分権の行使としてのみ実現され、その処分権の行使は、生活手段をふくむ生産条件の排他的所有に還元されるから、つまるところ、必要労働をこえる労働日の延長による剰余労働は、生産条件の排他的所有にもとづくことになる。

そこで、労働力の価値と使用価値とがともに生産条件の排他的所有という一つの関係にはつする特殊歴史的な二つの相異なる契機だとすれば、剰余価値は、労働力の使用価値をあらわす労働日と労働力の価値との差額だから、労働力を媒介にしてうまれる生産条件の排他的所有それ自身の所産だということに帰着する<sup>②</sup>。まさに、「資本主義的生産の対立的な性格にもとづいて行なわれる資本の価値増殖」(*Kapital*, III, S. 457)とマルクスが規定するとおりである。だから、剰

余価値をうむのは労働力だという規定は、労働支出の源泉をのべたにすぎない。「剰余価値の唯一の源泉は生きている労働なのである」(*Kapital*, III, S. 158) というのも、剰余価値の出所をしめす規定にすぎない。労働力は、生産条件を排他的に所有する資本家の生産活動のもとでのみ剰余価値をうむから、結局、生産条件の排他的所有こそ、剰余価値創造の直接的な規定要因である<sup>③</sup>。生産条件の排他的所有が労働力による剰余価値創造を規定する因果は、太陽光線が月の表面に反射して月光に転化するその関係に類似する。マルクスによれば、等価形態にたつ商品の使用価値がもつ直接的な交換可能性の形態は、相対的価値形態にたつ商品による価値表現の結果—「反射規定 (Reflexionsbestimmung)」(*Kapital*, I, S. 72) —だという<sup>④</sup>が、まさに、労働力による剰余価値の創出は、その商品化をもたらす生産条件の排他的所有の反射にすぎない。「賃労働とその使用との独自の規定性」(*Mehrwert*, MEGA, II / 3 · 3, S. 1124) は、「自分と交換される商品の価値を増大させ剰余価値をうみだすという規定性」(*Ibid.*) である一方、「賃労働としての労働と、資本としての労働条件とは、同じ関係の表現であ」(*Ibid.*, II / 3 · 4, S. 1491) だとすれば、剰余価値を創造する労働力の独自の属性は、生産条件の排他的所有の直接的な作用結果として成立するにすぎない。マルクスのいう「貨殖の秘密」(*Kapital*, I, S. 189) とは、生産条件の排他的所有によってなりたつ生産関係そのものにある。

だから、生産条件の排他的所有が生産関係の表現だという事柄には、それが同時に剰余価値発生の直接的な規定要因だという内実がふくまれる。資本が剰余価値の母胎だということは、生産条件の排他的所有が、剰余価値という特殊歴史的な要素をうみだすことにひとしい。まさに、「資本の増殖能力」(*MEGA*, II / 3 · 5, S. 1604) は、「社会的な生産関係の結果」(*Ibid.*) である。推論するところ、マルクスのいう「剰余価値の本性 (die wahre Natur)」(*Kapital*, II, S. 178) には、それが生産条件の排他的所有の独自の所産である要素がふくまれる<sup>⑤</sup>。

以上、本節で、生産条件の排他的所有が剰余価値の発生を特殊歴史的に規定する独特な社会関係を分析した。資本が生産関係だということは、生産条件の排他的所有がその独自の産物として剰余価値をもたらすこととイコールである。資本が生産関係だという根本命題は、生産条件の排他的所有こそ剰余価値発生

の根拠である秘密をふくんでいる<sup>⑥</sup>。マルクスにとって剰余価値が生産条件の排他的所有そのものの所産である因果は、シャボン玉がまるいのおなじように、絶対的な法則である。

- ① 「労働者に剰余労働を強制する関係は、彼の労働諸条件が彼に対立して資本として定在しているということである。」(MEGA, II/3・1, S.182) ようするに、生産条件の排他的所有にもとづいて、労働力が生産過程での資本の成分をなし、価値を増加させる権能が資本の機能になるため、労働力から剰余価値が発生する。「労働力は、可変資本が生産過程のなかでとっている形態である。」(Kapital, I, S. 616) 「価値を創造し増加させる力は、労働者のものではなくて資本のものである。」(MEGA, II/3・1, S. 99)
- ② マルクスは、重農学派にたいしてつぎのような批判をくわえている。「剰余価値の形成が、資本そのものからは説明されないで、ただ、資本の一つの特定の生産部面である農業だけのものとして主張される。」(Kapital, II, S. 222) 資本そのものからの剰余価値形成の説明こそ、解決すべき問題だという明言は、千鈞のおもみをもつ。
- ③ 生産条件の排他的所有が剰余価値を規定するため、資本主義では、生産条件に代表される死んだ労働が労働者による生きた労働を支配するという主客転倒がなりたつ。つまり、死んだ物質的財貨が生きた労働者をつかって自己増殖する一方、労働者は、生産のための生産活動がさかんになるためのたんなる手段になる。マルクスは、資本主義をもって「生産過程のために労働者があるのであって労働者のために生産過程があるのではないという形態」(Ibid., I, S. 514)と特徴づけている。また、『共産党宣言』ではつぎのようにいわれる。「ブルジョア社会では、資本が独立的で人格的であるが、働く個人は非独立的で非人格的である。」(Manifest, Werke, Bd. 4, S. 476) ここで、資本が独立的な人格なのは、死んだ労働が主体となって労働者を支配するためである。ぎゃくに、労働者が非独立的で非人格的なのは、死んだ労働の自己増殖のたんなる手段として客体的な存在にすぎないからである。『共産党宣言』は、なんど読みかえしても底がふかい。
- ④ 「上着の等価物存在は、いわば、ただリネルの反射規定なのである。」(『資本論第1巻初版』国民文庫, 22[原] ページ, 圏点—マルクス)
- ⑤ 別の箇所にも、「剰余価値の本質 (das Wesen), すなわち剰余価値とは、売り手がそれにたいして等価物を与えなかったのに、つまり売り手がそれを買わなかったのに、販売において実現される価値であるという剰余価値の本質」(Mehrwert, MEGA, II/3・2, S. 349) という文言がある。ここで、「剰余価値の本質」とは、交換を媒介しながら等価なしで剰余労働を取得する契機をさすが、交換を基礎にした不払労働の取得は、生産条件からの労働者の分離にもとづくから、「剰余価値の本質」の内面には、剰余価値が特有な生産関係の果実であるという要素がふくまれている。

- ⑥ マルクスは、「資本と労働との同一性」(Ibid., MEGA, II/3・4, S. 1392, 圏点—マルクス)を強調しているが、資本と賃労働の同一性には、生産条件の排他的所有が労働力による剰余価値創造を直接規定する因果関係がふくまれると推論される。したがって、『資本論 (Das Kapital)』という表題は、賃労働の分析をその射程にふくむ事実からおして、資本と賃労働との同一性を暗示している。ついでにふれば、資本が労働力による剰余価値創造を成立させるその資本と賃労働との同一性とおなじ関係は、富と貧困との相関にもあてはまる。資本家にとっての富である剰余価値は、その分量だけ労働成果のおちこみであるため、それ自身、労働者にとっての貧困を規定する。労働力による剰余価値創造を生産条件の排他的所有のはんめんにみいだす方法は、貧困を富のはんめんととらえるマルクスの貧困規定の一番の特色とおなじ性格をもつ。剰余価値が富と貧困の二重性格をもつように、生産条件の排他的所有は、資本と賃労働の二重性格を内包する。資本と賃労働との同一性は、富と貧困の同一性でもある。さらに、資本と賃労働の同一性命題から、資本の増大は、同時に賃労働者数—労働者人口そのものとそのうちの就業者数の両方—の増加でもある関連がなりたつ。「資本の蓄積はプロレタリアートの増殖なのである。」(Kapital, I, S. 642)「資本の増大とプロレタリアートの増殖とは、同じ過程の対極的に分かれた所産だとはいえ、同じ過程の共属的な所産として現われる。」(『直接的生産過程の諸結果』493[原] ページ, 圏点—マルクス) 資本蓄積は、労働者人口をふやすとともに、就業労働者数も増加させる。

#### 4 先行研究の陥穽

これまでの展開で、生産条件の排他的所有の必然的な帰結として、労働力による剰余価値創造が規定される脈絡をといた。ところが、通常、剰余価値は、生産条件の排他的所有とは別個に、労働力そのものの特有な属性からみちびかれる。しかし、剰余価値の発生根拠が労働力の特殊性にあるとすれば、剰余価値をその独自の産物としてうみだす資本は特定の生産関係だという命題は、空語と化してしまう。そこで、最終の本節で、剰余価値を労働力そのものの特殊性からみちびく見地に検討をくわえ、資本が生産関係だという命題の未消化を指摘する。

資本が生産関係だという命題の軸心は、生産条件の排他的所有の直線的な結果として剰余価値がなりたつ一本のザイルのように強靱な社会関係にある。剰余価値は、生産条件の排他的所有がもたらす独自の所産であるため、資本は、

生産条件の排他的所有によってなりたつ特有な生産関係だという命題が成立する。ところが、先行研究にあっては、剰余価値は、蓄積財源をつくりだす労働力のもつ特殊性からうまれるという考え方が根強く定着している。それは、つぎの引用文にみられるとおりである。

「労働力なる商品は、剰余価値を産み出すといふ一種の特徴を有して居る。その理由は、元来人間なるものは、自己の消費するよりも遙に余分のものを生産する力を有するからである。」(河上 肇『近世経済思想史論』岩波書店、1920年、270ページ)

「労働力という商品は、一たび働きはじめると、労働という形で、それ自身を再生産するのに必要な働き以上の働きをするという特性をもっている。」(クチンスキー『絶対的窮乏化理論』有斐閣、新川士郎訳、81ページ)

「労働力は、他のどの商品ともちがって、自分自身の価値以上の価値を生産することができるという点で特別なのだ。」(レオ・ヒューバーマン『資本主義経済の歩み』[下] 岩波新書、小林良正・雪山慶正訳、98ページ、圈点—ヒューバーマン)

「労働力という商品は他の商品とちがって生きものであるから、実際に受けとった対価以上のものを生産することができる。」(高島善哉『アダム・スミス』岩波新書、1968年、172ページ)

「労働力商品は、その使用によって価値増殖をもたらしようという特性をもっております。<sup>①</sup>」(廣松 渉『今こそマルクスを読み返す』講談社現代新書、1990年、107ページ)

生産条件の排他的所有が剰余価値を規定する根拠であるかそれとも蓄積財源をうむ労働力の属性を根拠として剰余価値がうまれるかは、『資本論』研究にとって宇宙の幅ほどの差がある。けだし、前者と後者とでは、貨殖の秘密は、人と人とのあいだの社会的関係か人と生産物とのあいだの自然的関係かというまったく正反対の二つの契機にもとめられるからである。蓄積財源をうみだす労働力の特殊な属性に剰余価値の秘密をもとめることは、剰余価値発生 of 究極の根拠が人による生産活動という自然的関係にあるということに帰着する。「労働力もまた、なによりもまず、人間有機体に転換された自然素材である。」

(*Kapital*, I, S. 229) 剰余価値発生の根拠を労働力が蓄積財源をうみだす事情にみいだす見解には、おおきく2つの問題点がある。

まず第1に、蓄積財源をつくる労働力の特殊性を根拠として剰余価値がうまれるという見地の根本欠陥は、剰余価値発生のお宝が生産関係に内在しないところにある。換言すれば、蓄積財源をうむ労働力の属性に剰余価値の発生根拠をもとめる見地にあつては、剰余価値が資本そのものによつて創造されるという基本認識に希薄さがある。蓄積財源をうみだす労働力の属性によつて剰余価値がうまれるという立場は、資本が剰余価値のたんなる取得の主体だという見方にひとしい<sup>②</sup>。「資本の自己増殖すなわち剰余価値の生産」(*Kapital*, III, S. 97)とか「自分を増殖する価値すなわち資本」(『直接的生産過程の諸結果』465[原ページ、圏点—マルクス])とかいうとおり、剰余価値は、資本から内在的にうまれるその独自の創造物にほかならない。だから、資本は、剰余価値取得の主体である以前に、本質的に剰余価値をうみだす創造の主体として機能する<sup>③</sup>。剰余価値の形成こそ、資本の根源的な機能をなし、その取得は、資本からの剰余価値の生成と背中あわせのたんなる結果にすぎない。資本が生産関係だという命題は、剰余価値が生産関係を根拠にしてうまれるという命題に帰着するから、労働力そのものの特殊性が貨殖の最終の根拠だという主張は、根本的には資本が生産関係だという命題のとちがえに帰着する。剰余価値が労働力の属性に規定された産物だという立場は、資本が剰余価値を規定する因果関係を中核になりたつ資本と賃労働との同一性を解消する。資本と賃労働とは、生産条件の排他的所有という同一の関係の両面にすぎない。

第2に、労働力が労働支出の源泉となつて剰余価値がうまれるというばあい、労働力と生産条件との分離という特殊歴史的な条件の見落としがある。つまり、そこには、生産条件の排他的所有にともなう労働力の社会的な被規定性の看過、いかえれば、労働力の価値と使用価値との二つの要因にたいして生産条件の排他的所有がおよぼす社会的な作用の閑却がある。生産条件の排他的所有すなわち生産条件からの労働力の疎外が扇のかなめになつて、労働力の再生産によつてするだけの制限された分量への必要労働分量の収縮と、その1日の使用権の資本家による取得に起因する必要労働をこえる労働日の延長とがともに実現す

る。だから、労働力の再生産にたるだけの限定された必要労働分量をあらわすその価値も、必要労働をこえる剰余労働となって実現されるその使用価値とともに、生産条件の排他的所有のもたらす社会的な結果である。労働者が生産条件を共同的にか個人的にか所有するばあい、蓄積財源を生産する労働支出をふくむ1労働日は、そのすべてが生産条件を所有者する労働者の再生産による必要労働にすぎない。その意味では、マルクスにおける労働力商品のもつ意義は、二重である。その一つ目の意義は、価値をもつ商品として販売される対象は、価値形成要素である労働ではなく、その源泉である労働力だというエンゲルスの強調した周知の論点<sup>④</sup>である。しかし、労働力商品のもつ意義は、それ以外にもう一つ別個に存在する。その二つ目の意義は、労働力商品のもつ価値と使用価値という二つの要因が、生産条件からの分離によって特殊歴史的に規定される点にある。労働力の価値と使用価値は、それが商品としてもつ二要因だから、その商品化を条件づける生産条件からの分離によって特殊歴史的に規定される。これまでの研究史にあっては、労働力の二要因が生産条件からの排除に規定された特殊歴史的な要素である事実、スポットがあたっていない。ようするに、古典派は、資本主義を生産の絶対的な形態とみる立場にわざわざされて、排他的所有になる生産条件から排他的所有という社会関係をみすごしたが、それと同様に、労働支出の源泉としての労働力それ自身に価値増殖の根拠をもとめる立場にあっては、その二つの要因に内面化された生産条件の排他的所有の作用がみおとされている。

以上、本節で、蓄積財源を生産する労働力の属性に剰余価値の発生根拠をもとめる立場には、資本が生産関係だという命題のなまかじりがある事実を吟味した。生産条件の排他的所有という特有な生産関係は、それ自身資本をなりたせると同時に、労働力による剰余価値創造を規定するのである。

- ① 廣松 渉『マルクスの根本意想は何であったか』情況出版、1994年、97ページにも、おなじ主張がある。
- ② 資本は、剰余価値のたんなる取得の主体だという見地は、生産過程以前の単純流通上での貨幣の資本への可能的な転化の否定につながる点で、累をおよぼす弊害をもつ。労働力が剰余価値をもたらす特性をもち、資本は、その取得の原因にすぎない。



いとすれば、生産の完了時点をまっぴら資本が成立するという見方がなりたつ。つまり、資本が剰余価値のたんなる取得の原因だとする立場は、第5章「労働過程と価値増殖過程」ではじめて、第4章表題の意図する「貨幣の資本への転化」がなりたつという理解とむすびつく。しかし、生産物ができた時点で資本が成立するとすれば、資本とその果実の剰余価値との同時成立は、概念上収拾不能な前後撞着をふくむことになる。けだし、前貸価値をこえる価値の超過分は、資本を根本前提にもつその特有な産物であるかぎり、剰余価値という規定をうけとるのだからである。ぎゃくに、剰余価値が資本から内在的にうまれるという立場からすれば、貨幣は、単純流通上であらかじめ資本をあらわす一般的等価物として剰余価値をうむ能力をもつため、貨幣の資本への可能的な転化がなりたち（『資本論』第I巻第4章「貨幣の資本への転化」）、生産過程で、資本による剰余価値の創造が実現することになる。「資本による労働力の生産的消費」(*Kapital*, II, S. 64, 圏点一頭川)すなわち貨幣の資本への現実的な転化は、単純流通での貨幣の資本への可能的な転化を前提する。資本を剰余価値の取得のたんなる主体だとみる立場は、剰余価値生産完了時点ではじめて資本の成立をみとめる考え方と通底している。

- ③ 「産業資本は、資本の存在様式のうち、剰余価値または剰余生産物の取得だけでなく同時にその創造も資本の機能であるところの唯一の存在様式である。」(*Ibid.*, S. 61)
- ④ 『賃労働と資本』国民文庫、村田陽一訳、9-21ページ。

## む す び

本稿で、生産条件の排他的所有の直接的な帰結として、それから分離された労働力による剰余価値の創造が規定されるすじみちを分析して、資本が生産関係だという『資本論』の基軸をなす一根本命題をときほぐした。だから、資本を蓄積された労働ととらえる古典派と労働力の特殊性に剰余価値の根拠をもとめるマルクス以後の先行研究とは、生産条件の排他的所有こそ資本の価値増殖の根拠をなす脈所を看過する点で、同一線上に位置づけられる。特定の生産形態にはそれぞれ特有な生産関係が対応するというマルクスの歴史的な観点は、階級社会のばあい、剰余労働が生産条件の特有な所有形態に規定された生成方法をもつというパラダイムとおなじである。生産条件の特定の所有形態には剰余労働の独自の創出方法が対応するという大局的な認識にかければ、生産関係による剰余労働創造の内面的な作用がみのがされる。生産関係の欠如というマルク

スがくわえた古典派批判は、剰余労働をもって蓄積財源をつくるいわば超体制的な労働と同一視する先行研究にもひとしくあてはまる。生産条件の排他的所有による固有な剰余価値創造の因果をといてはじめて、資本が生産関係だという命題は、その正当性が回帰的に検証され、みかけだおしのキャッチコピーだという批判をまぬがれる。資本とは生産関係だというマルクスの命題には、ひすいのように時代の新旧をこえてもつゆうげんなかがやきがある。